

日本関係の初期録音とその時代背景を教える： 「音楽史 A」における授業構成

山 田 晴 通

はじめに

複数開講されている青山スタンダード科目「音楽史 A/B」のうち、小職が2003年度から担当してきた枠では、おもにポピュラー音楽を主題として扱っている。そこでは、前期「音楽史 A」の前半で山田（2003）を教材として用いながらポピュラー音楽の歴史を考察する上で必要となる基本的な理論的枠組を学び、後半でジャズの歴史の概要を講じ、後期「音楽史 B」でロック音楽の歴史の概要を講じる、という構成をとっている。本稿では、山田（2016）に準じる形で、「音楽史 A」の前半部分で言及される、日本関係の初期録音をめぐる議論をとりあげた部分（以下、「単元」と称する）における授業実践の概要を報告する。この単元には、例年概ね授業1回分ほどを使っている。

以下では、実際に授業で使用しているパワーポイントのスライドから、議論の構図を図示したものを中心に抜粋して示しながら、授業の概要を紹介していく¹⁾。

講義における単元の位置づけ

講義で教材としている山田（2003）では、「大量複製技術と商品化」という節を設けて、「ポピュラー音楽」とは、「大量複製技術を前提とし、大量生産～流通～消費される商品として社会の中で機能する音楽であり、とりわけ、こうした大量複製技術の登場以降に確立された様式に則った音楽である」という操作的定義を提案している（p.9）。その上で、この節では、ヴァルター・ベンヤミンの議論なども参照しながら、複製技術のひとつの姿としての自動演奏機械

の歴史にも言及した上で、録音（蓄音器とレコード）と放送（ラジオ）が、大量複製技術として決定的に重要であったことを指摘している（pp.10-14）。

教材のこの部分を踏まえ、教材では詳細な言及はないが、自動演奏機械について、授業1回分程度をかけて説明した上で、さらに録音技術の発明と実用化の歴史について、授業1回分程度をかけて説明する。そこでは、音の本質が空気の振動であるという考えは、古代ギリシアからあったこと、しかし、それがより実体的な知識として確立されるのは、耳の構造についての解剖学的知見が充実していく16世紀以降であったことなどに触れた上で、最初に録音技術の特許を得たのは1877年のトマス・エジソン（Thomas Alva Edison, 1847-1931）による錫箔を用いた円筒式蓄音機であったが、これは直ちには実用化されず、この前後の時期には電話の開発とも絡みながらアレキサンダー・グラハム・ベル（Alexander Graham Bell, 1847-1922）らとの熾烈な開発競争、実用化競争が展開されたことや、いち早く提案された円筒式に対して、ベルの傘下から登場したエミール・ベルリナー（Emile Berliner, 1851-1929）による円盤式が、プレス技術による複製製造の容易さから、優越した実用的な技術へとつながっていった経緯を説明している。

そこで言及しているおもな年号を、年表形式でまとめたパワーポイントのスライドは、次のようになるが、日本関係の初期録音を取り上げる単元は、その延長線上で展開されることになる。（図1）

講義においてテキストとして用いている山田（2003）には、日本関係の初期録音に直接言及した部分はない。それにもかかわらず、このテーマを独立したひとつの単元として取り上げるのは、録音の発明、実用化、普及という、世界的な普遍性をもった歴史的事象が、日本という地域の特異性とどのように関わるのか、言い方を変えれば、録音技術、あるいは、音盤の大量複製技術が登場したタイミングは、日本の音楽文化にとってどのような時点であったのか、そのことが日本の音楽文化にどのような影響を与えたと考えられるのか、について考える機会を受講者に与えたいからである。

録音の登場

- 1876年 ベルによる電話の特許
- 1877年 エジソンによる円筒式蓄音機(錫箔を使用)1885年 ベルらによる蝋管式蓄音機の開発
(1886年に特許取得、1887年に商品化)
- 1887年 エジソンによる蝋管式蓄音機の開発
- 1887年 ベルリナーの円盤式蓄音機特許申請
(1889年に商品化)
- 1892年 蝋管複製の実用化
- 1900年 円盤のプレス量産の実用化

図1

授業内容

この單元では、直前の單元が、技術史的な意味での導入となっているので、導入は簡単なものにとどめ、ふたつの日本関係の初期録音に関する議論、および、関連する当時の日本の洋楽導入状況についての軍楽に注目した議論という、合わせて3つの本論に進む形をとっている。ただし、考え方によっては、本論1としている川上一座のパリ録音に関する議論も、以降の議論への序論ないし導入的な側面をもっていると見なすこともできよう。後述するように、パリ録音の音源はほとんど商品として流通しなかったと見ることができるのに対し、ガイズバーグ録音の一部は、相当数が日本に輸入されて流通したことが確認されている。音楽の商品化という観点からすれば、後者の重要性ははるかに大きいからである。

1) 導入：日本関係の初期録音の見取り図

授業の導入として、この單元で「日本関係の初期録音」として扱う具体的な対象を限定的に明示した見取り図を提示する。具体的には、日本人の演奏/演技を記録した最初の録音としての1900年の「川上音二郎一座のパリ録音」と、

日本国内における最初の録音としての 1903 年の東京における一連の「ガイズバーク録音」を日本関係の初期録音の中心とし、これを補うものとして前者に準じる 1901 年の「川上貞奴のベルリン録音」、後者に準じる 1903 年の米国コロムビアの出張録音があることにも言及する。実は、日本における録音については、より早い時期から行なわれていたとする様々な記述がある。しかし、実際に音源が現存し、公開されているものとしては、これらを最も初期の録音事例とすることが一般的である²⁾。

これまで授業中に、筆記によるアンケートや、挙手など簡易な方法で受講者からフィードバックをとってきた経験から、この単元で取り上げる内容についての受講者の予備知識は皆無に等しいこと、また、その時代背景についても理解が貧弱であることが明らかになっている。これを前提に、関連して登場する固有名詞等を含め、以下で丁寧に説明することを予告した上で、必要に応じてスライドの内容を筆写するよう促す。(図 2)

また、この導入の時点で、1900 年なり 1903 年というタイミングが、まとまった録音が残されている時期としては、実は比較的早く、例えば、ジャズやブルースの最初期の録音に十数年から二十年以上も先んじていたことも³⁾、ま

日本関係の初期録音

- 1900年 川上音二郎一座のパリ録音
- 1901年 川上貞奴のベルリン録音
日本人の演奏/演技を記録した最初の録音
- 1903年 東京におけるガイズバーク録音
日本国内における最初の録音＝出張録音
→同年には、米国コロムビアの出張録音も

図 2

た、そこに、現代的な意味における「オリエンタリズム」、あるいは、「コロニアリズム」の視線があったことも、指摘しておく。

2) 本論1：1900年「川上音二郎一座のバリ録音」

一般的に、日本人のパフォーマンス（演奏、演技）を記録した最初の音源とされているのは、1900年のパリ万博の際に、パリで興行を行っていた「川上音二郎一座」によるベルリナー盤への録音である⁴⁾。米国人研究者J・スコット・ミラーによって1990年代半ばに英国EMIのアーカイブに存在が確認された音源は、1997年に『甦るオッペケペー 1900年 パリ万博の川上一座』としてCD化されている。

この録音には座長の音二郎も、一座の花形となっていた貞奴も、参加していない。また、ミラーによれば、商品のカタログに掲載されていた事実はあるものの、諸般の状況から判断してほとんど商品として流通していなかったものと判断されている。この録音にあたったEMIの録音技師の氏名は確定されていない。しかし、後に1903年の日本出張録音を行なったフレッド・ガイズバーグであった可能性が極めて高いとされており、一部の資料はガイズバーグによる録音と断言している⁵⁾。

川上一座は、1901年にいったん帰国した後、直ちに第2回の欧米巡業に出て、1901年のベルリンで、貞奴による琴の演奏などの蠟管への録音が行なわれた。

授業では、「オッペケペー」のほか、「こちゃ江婦志」をかけ、さらに時間に余裕がある場合は、「笑の試験」などをかける。「オッペケペー」は、説明抜きで聞かせた上で、歌詞を解説し、改めてかけ直すこともある。また、後年の他のパフォーマーによる録音に比べ、テンポが速いことにも言及する⁶⁾。ベルリン録音については、入手可能な音源が「死の歌」しかないため、これをかけるが、時間的制約から省くこともある。

3) 本論2：1903年「ガイズバーグ録音」

ここでは、おもにCD『全集・日本吹込み事始』の解説冊子に寄稿されてい

る、細川周平、都家歌六、岡田則夫、山本進らによる記述を参考している。ガイズバーグは日記を残しており、いずれの書き手もそれを参照している⁷⁾。

通例、「録音技師」として言及されることが多いフレッド・ガイズバーグ(1873-1951)は、ベルリナーのもとで働いていたドイツ系アメリカ人であったが、後にはおもにイギリスのグラモフォン社のためにヨーロッパ各地で出張録音を行なった人物である。彼は、レコードを通してスターとなった最初期の事例とされるテノール歌手エンリコ・カルーソー(1873-1921)を世に送り出すなど、「音楽プロデューサー」とか「A&R」といった概念がなかった時代の偉大なプロデューサーであったと見なせる実績を残した。ガイズバーグは、1902年から1903年にかけて、南アジア、東南アジアを経由して日本に至る出張録音の旅に出たが、この旅自体が、大きな利益をもたらした彼に対する人生最大の旅の機会を与える、社のはからいであったようにもみえる。

このアジアへの旅の間に出張録音されたおよそ1700面のうち、273面が日本関係の録音としてリスト化された。それらは、ガイズバーグが1903年2月4日から28日にかけて築地の「メトロポール・ホテル」に設けた仮設の録音スタジオで収録されたものである。原盤は長らく忘れられた存在であったが、1997年に都家歌六(八代目：1930-)によってEMIのアーカイブにおいて存在が確認され、そのうち劣化等によって音源化が困難なものを除いた265面がCD11枚に収められて2001年に発売された。

ガイズバーグ録音には、雅楽から寄席芸まで、実に多様な音源が残されているが、それが可能になった背景には、録音に協力した快樂亭ブラック(初代)こと、ヘンリー・ジェイムズ・ブラック(Henry James Black, 日本名：石井貌刺屈, 1858-1923)の存在があった。(図3)

授業では、多様な音源の中から、雅楽師長・東儀季熙らによる「越天楽(平調)」, 富士松ぎん蝶による三味線を使った寄席芸「両国八景」, ブラックによる落語(小話)「風土言葉の咄」などを紹介する。その上で、新吉原の芸妓たちによるプラスバンドである吾妻婦人音楽連中について、集中的に取り上げ、「君が代」「君が代マアチ」「カッポレ」と、東婦人音楽連中名義の「紀の国カ

日本関係の初期録音

- 1903年 ガイズバーグ録音
- 雅楽、謡曲、狂言、琵琶
- 浄瑠璃(義太夫、常磐津、娘義太夫、清元)
- 長唄、俗曲、三曲、合奏
- 演劇、浪曲、声色、落語、法界節、詩吟...
- 全部ではないが、商品化され、かなり流通した録音もあった

図3

ッポレ」をかける。「君が代」は7インチ原盤と10インチ原盤で録音された上で、さらにマーチに編曲されたものが録音されていた。また、「西洋音楽日本譜」と銘打たれた吹奏楽の「カッポレ」と、彼女たちの本来の楽器である邦楽器合奏による「紀の国カッポレ」の対比を行ない、その中で、芸妓のプラスバンドという着想が、今日ほど突飛なものではなかったと考えられることを指摘する。また、このユニークな女性音楽グループが録音後の演奏旅行の途上で海難事故に遭遇して多くの犠牲者を出し消滅してしまったことなどにも言及する⁸⁾。

4) 本論3：日本におけるおもな軍楽指導者の流れ

幕末から明治にかけての洋楽受容の過程において、軍楽が賛美歌と並んで重要な回路となっていたことは、既に定説となっている⁹⁾。以下、この部分では、おもに中村理平『洋楽導入者の軌跡』(1993年)や、阿部勘一ほか『プラスバンドの社会史』(2001年)などを参照しつつ、御雇外国人として活躍した軍楽指導者たちについて紹介する。

しかし、この部分では受講者には、節題に挙げたような真の講義テーマを最

初から提示することはしない。スライドでは、あえて「ちょっと横道へ」というタイトルを掲げ、ガイズバーグ録音に「君が代」の演奏が複数の含まれていることに確認した上で、そもそも「君が代」はいつ頃からあったのか、と問いかけ、受講者に考えさせる。

次いで、一般的にはあまり知られていない1869年作曲の初代「君が代」と、その作曲者であるジョン・ウィリアム・フェントン（John William Fenton, 1831-1890）について、経歴などを紹介する¹⁰⁾。初代「君が代」については、適当な歌唱の音源が手元にないため、場合によっては受講者から読譜力のある者を複数指名し、その場で楽譜を渡して、器楽演奏を流しながら歌うことを試みさせるか、授業担当者が自ら歌ってみせ、その旋律が歌唱に不向きであることを具体的に示す。（楽譜）¹¹⁾

その上で、1880年に奥好義（おく よしいさ、1857-1933）作曲、林廣守（はやし ひろもり、1831-1896）撰として定められた現行の「君が代」の成立経緯について説明し、最終的に旋律を整え、西洋音楽の吹奏楽に編曲したのが、フェントンに代わって海軍省雇教師の任にあったドイツ人、フランツ・エッケ

初代「君が代」

き み が よ は ち よ に
や ち よ に さ ざ れ
い し の いは ほ と な り
て こけ の む - す ま で

出典：CD『君が代のすべて』解説冊子

ルト (Franz Eckert, 1852-1916) であったことを、エッケルトの後年の経歴 (1899年にドイツへ帰国後、1901年に大韓帝国時代の京城に赴き、日韓併合後の京城で没した) も含めて説明する。

さらに、陸軍の音楽教師であったフランス人、シャルル・ルルー (Charles E. G. Leroux, 1851-1926) が在任中の1885年に作曲した『観兵式分列行進曲』(吹奏楽曲『扶桑歌』)を紹介し、この曲が、1943年10月21日の明治神宮外苑競技場における学徒出陣壮行会のニュース映像でも印象的に用いられていることを指摘する。そして、以上の事例を通して、当時の陸海軍が英独仏から指導者を招いて普及に努めた軍楽が、明治時代の日本にとって洋楽受容の重要な経路のひとつとなっていたことを確認する。

次いで、日本人の作曲による本格的な軍楽、ないし、行進曲の登場として、広く知られている行進曲「軍艦」(通称「軍艦マーチ」)を紹介し、これが海軍の軍楽指導者であった瀬戸口藤吉(1868-1941)の作曲作品であること、1900年に初演され、ガイズバーク録音と同年の1903年7月の録音(発売は翌1904年9月)があることを説明し、この曲の初録音である、米コロムビアの出張録音による海軍軍楽隊の演奏を流す¹²⁾。

以上、この部分で言及しているおもな年号を、年表形式でまとめれば、以下のようになる。ただし、これは、このままの形ではスライドとして提示しない。

- 1868年 フェントン来日
- 1869年 フェントン作曲「君が代」(初代)
- 1877年 フェントン離任、渡米
- 1879年 エッケルト来日
- 1880年 「君が代」(現行)、エッケルト編曲
- 1884年 ルルー来日
- 1885年 ルルー作曲「観兵式分列行進曲」
- 1889年 ルルー離任、帰国
- 1890年 フェントン、米国で死去

日本関係の初期録音とその時代背景を教える：「音楽史 A」における授業構成

1897 年ころ 瀬戸口藤吉が「行進曲軍艦」を作曲

1899 年 エッケルト離任，帰国

1900 年 瀬戸口藤吉作曲「行進曲軍艦」初演

1901 年 エッケルト，大韓帝国時代の京城へ

1903 年 「行進曲軍艦」初録音

1904 年 瀬戸口藤吉が海軍軍楽長となる

1916 年 エッケルト，京城で死去

4) 結論：日本における西洋音楽の普及と録音技術登場の同時性

以上の議論を踏まえ、1900 年ないし 1903 年という、日本の音楽文化が録音技術と邂逅したタイミングが、ちょうど西洋音楽の普及の努力が、御雇外国人教師などの手から、彼らによって育成された日本人の手へと移されていく時点と一致していたことを指摘する。これを傍証するものとして、音楽取調掛から発展した東京音楽学校が生み出した最初期の才能であった瀧廉太郎（1879-1903）の経歴を挙げ、代表作のひとつである『荒城の月』が 1900 年の作品であること、瀧が 1903 年にピアノ曲『憾（うらみ）』を残して死去したことを紹介する¹³⁾。

1903 年のガイズバーグ録音は、録音技術の登場以前に普及していた日本の多様な音楽文化を、またそれのみならず、聴覚に訴える音声による芸能一般をも幅広く記録した。私たちはその記録を通して、雅楽が当時も今と同じように響いていたこと¹⁴⁾、既に廃れてしまった幾多の音声の芸能があったことを知ることができる。しかし、それだけではなく、ガイズバーグ録音は、普及と土着化が始まっていた日本の西洋音楽の姿をも、限定的な形ではあるが、しっかりと捉えていた。言い換えれば、日本における日本人による西洋音楽の歴史は、その起点から録音による記録の機会に恵まれていた、ということになる。これは録音技術以前から西洋音楽が存在していた欧米の経験とも、まとまった量の初期録音の実現がより遅い時期にズレ込んだ多くの非欧米地域の経験、あるいは、欧米地域内の疎外された少数派の経験（ジャズやブルースなどの歴史を想

起されたい)とも異なる、ユニークなものといえる。

世紀転換期の日本は、日清戦争(1894年-1895年)と日露戦争(1904年-1905年)の間で、日本、あるいは、当時的大日本帝国は、欧米列強から文明を吸収し、富国強兵策を通してそれに並ぶ存在にならんとしていた。幕末に結ばれた不平等条約の改正への努力は、陸奥宗光(1844-1897)が外務大臣だった1894年に領事裁判権の撤廃などを実現する一連の条約が結ばれ(発効は1899年)、最終的には小村壽太郎(1855-1911)が外務大臣だった1911年に関税自主権が獲得されるまで続いた。このような経過も、世紀転換期が、御雇外国人の教師や技術者たちに依存する段階から、その下で育った日本人へとバトンが渡される時期であったことを示している。ちなみに、第五高等学校教授であった夏目漱石(1867-1916)が英国留学に赴いたのが1900年、帰国して東京帝国大学および第一高等学校講師となったのが1903年であり、これに伴って東京帝国大学を退職することとなった小泉八雲(ラフカディオ・ハーン、1850-1904)は、翌年に死去している。当時は、様々な分野で、同様の経過があり、音楽の分野における瀧や瀬戸口の登場も、その一環であったと見るべきであろう。

おわりに

前稿(山田、2016)でも述べたように、音楽史A/Bでは、残念ながら日本の事例に言及する余裕がほとんどない。しかし、この単元のように、受講者たちの大部分がほとんど知識を持ち合わせていない、明治期の日本の音楽文化の歴史の一端に触れることで、受講者たちに日本における音楽文化の歴史性、その特異性を伝えることができているとすれば、この単元は一定の目的を果たしているものと、授業担当者としては考えている。

注

- 1) この単元の内容の原型となったのは、2002年度に国立音楽大学で担当した「ポピュラー音楽研究」の講義の一部であった。2003年度から青山学院大学で「音楽史A」を担当することとなり、その授業構成を考えた際に、「ポピュラー音楽研究」の内

容を流用した上で、新たにパワーポイントを組んだ。その後、2005年に東京経済大学で「音楽文化論」の一部としてこれを流用した際に、大幅な変更を加え、これを2006年以降の「音楽史 A」でもほぼそのまま利用するようになって現在に至っている。

- 2) 例えば、レ・コード館を擁する北海道新冠町のウェブサイトには「レコードの歴史年表」が公開されており、エジソンによる開発の翌年にあたる1878年には、早くも日本に蓄音器が紹介されていたこと、1879年のジェイムス・アルフレッド・ユーイング (James Alfred Ewing, 1855-1935) による公開実験 (この実験に使用された「蘇言機」と称された錫箔蓄音機は、国立科学博物館所蔵、2004年に重要文化財指定)、1896年の蓄音器の商品輸入開始などが言及され、国産蓄音器についても、1891年に試作例があったことが記載されている。さらに、1899年には、日本最初の蓄音機専門店として三光堂が浅草で開業し、「蠟管録音式の三光堂自家録音で当時流行の俗謡曲吹き込む」とも記されている。 (<http://www.niikappu.jp/kurashi/kyoiku/bunka-sports/record/history/nenpyou.html>)
当時、蓄音器は、再生機能のみならず録音機能をもっていたので、日本国内においても相当数の録音が19世紀から行なわれていたはずであるが、現存するもの、あるいは、現存し、音源として公開されているものは、管見する範囲では見当たらない。ご存知の方のご教示を乞うところである。
- 3) 一般的にジャズの最初の録音とされるのは、1917年のオリジナル・デキシード・ジャズ・バンドによる一連のニューヨークでの録音であるが、ジャズ自体は、1900年ころにはニューオリンズに存在していたと考えられている。また、ブルースの初期録音は、1900年代からあるとも言われるが、単に曲名に「ブルース」の語が含まれている曲の録音事例と見るべきものもある。一般的にブルースの初期録音とされるものの録音時期は、1920年代以降に集中している。ちなみに、ロバート・ジョンソンの録音は1936年と1937年である。
- 4) 1900年のパリ万国博覧会の際に記録された日本人の音声としては、2002年に、清水康行や豊島正之によって確認された、パリ民族音楽学研究所所蔵の蠟管14点もあるが、こちらは談話であり、音楽の演奏は含まれていないようである。(朝日新聞・朝刊、2003年10月17日、37面、「100年前の日本人の声発見 録音したロウ管、パリに眠る」)
- 5) CD『甦るオッペケペー』の解説に収録されたミラー (1997) ではガイズバークだとする断定は避けられている。一方、Ströbbaum (2010, p.76) は、ガイズバークだと断定しているが、注記されたディスコグラフィの内容には疑問があり、誤解に基づく記述である可能性もある。
- 6) 「オッペケペー」のテンポには、当然ながら緩急の揺れがあるが、早い部分ではBPM220近い速いテンポで語り (現代でいえばラップ) がまくしたてられる。例えば、録音が残されている後年の桜井敏雄 (1909-1996) や、現代の土取利行 (b.1950) などの「オッペケペー」のパフォーマンス (桜井はBPM180程度、土取はBPM195程度) と比較しても明らかにテンポが速い。
- 7) ガイズバークの日記は、抜粋を編集したものがネット上で公開されてる (STRÖTBAUM, 2010b)。日本関係の記述は、長崎に到着した1月12日 (p.35)

から2月28日付の東京における記事(p.45)までにある。

- 8) 1903年5月1日夜、演奏旅行の途上で広島宇品港から「早速丸」に乗船し、松山港へ向かっていた一行は、「早速丸」が韓国船籍の「漢城号」と衝突して沈没し、多数の犠牲者を出した。
- 9) 例えば、日本における洋楽受容史の簡潔な概説である樋口(2012)は、前書きにあたる「問題意識」、「一、その前史」に続けて「二 軍楽隊と賛美歌」という節(pp.4-5)を設けており、以下、「三、明治初期(一八六八年〜一八九〇年頃)」などと記述が続く。
- 10) フェントンについては離日後の経歴が長らく不明であった。今世紀に入ってから、秋山紀夫の調査によって、米国で墓が発見されるなどして、詳細が判明してきた。(<<ジョン・ウィリアム・フェントンの記録>> 2008年9月30日 秋山紀夫・編) <http://www.musicpenclub.com/talk-200811.html>
- 11) フェントンの直筆譜とされるものは、歌詞を記しておらずハ長調で書かれている。歌詞を併記した楽譜としては、妹尾幸次郎(1891~1961)による1918年のものが流布したとする記述もあるが、これはヘ長調に移調されている。授業では、CD『君が代のすべて』の解説冊子に掲載されているハ長調で歌詞を併記した楽譜を用いている。
- 12) 瀬戸口藤吉と行進曲「軍艦」については、谷村(2000)などを参照。
- 13) かつての授業では、CD『瀧廉太郎作品集』(1993年、ビクターエンタテインメント)を使用して「荒城の月」、「憾」をかけたこともあったが、近年では時間の関係で取り上げていない。
- 14) 筆者のような雅楽の素人には「当ても今と同じように響いていた」ように聞こえるが、専門家はこの録音から、現代との差異を読み取っている。ガイズバーク録音では、音盤の録音時間の制約に合わせるため、楽曲の多くが短く編曲され、演奏のテンポも上げられていたという。寺内(2002)を参照。

ディスコグラフィ(授業内で音源として使用するもの)

川上音二郎一座のバリ録音:

『甦るオッペケペー』1997年、「オッペケペー」など

川上貞奴のベルリン録音:

『恋し懐かしはやり唄』1998年、日本コロムビア(DISC3所収「死の歌」)

ガイズバーク録音:

『全集・日本吹込み事始』2001年、EMI ミュージック・ジャパン(DISC1所収「越天楽(平調)」, DISC7所収「西洋音楽日本譜 君が代」など)

軍楽関係:

『君が代のすべて』2000年、キングレコード(フェントン「君が代(初代)」など)

『復刻版! 戦前日本の名行進曲集~陸軍軍楽隊編~』1995年、キングレコード(シャルル・ルルー「分列行進曲」)

『軍艦マーチのすべて』1998年、キングレコード(「行進曲軍艦」: 1903年の初録音)

文献

- 阿部勘一, 細川周平, 塚原康子, 東谷護, 高澤智昌『プラスバンドの社会史 軍楽隊から歌伴へ』青弓社〈青弓社ライブラリー〉, 2001.
- 樋口隆一「近代日本の洋楽受容」, 『言語文化』(明治学院大学言語文化研究所), 29, 2012, pp.3-14.
- ミラー, J・スコット「聞き手を失った音：一九〇〇年パリ万博での川上一座録音」CD『甦るオッペケベー』解説冊子, 1997, pp.6-22.
- 中村理平『洋楽導入者の軌跡 日本近代洋楽史序説』刀水書房 1993
- STRÖTBAUM, Hugo *The Fred Geisberg Diaries: Part 1: USA & Europe (1898-1902)*. recordingpioneers.com. 2010a. (http://www.recordingpioneers.com/docs/GAISBERG_DIARIES_1.pdf)
- STRÖTBAUM, Hugo *The Fred Geisberg Diaries: Part 2: Going East (1902-1903)*. recordingpioneers.com. 2010b. (http://www.recordingpioneers.com/docs/GAISBERG_DIARIES_2.pdf)
- 谷村政次郎『行進曲「軍艦」百年の航跡 日本吹奏楽史に輝く「軍艦マーチ」の真実を求めて』大村書店, 2000.
- 寺内直子「20 世紀における雅楽のテンポとフレージングの変容：ガイスバーク録音と邦楽調査掛の五線譜」, 『国際文化学研究』(神戸大学国際文化学部), 17, 2002, pp.85-111.
- 山田晴通「ポピュラー音楽の複雑性」, 東谷 護, 編『ポピュラー音楽へのまなざし』勁草書房, 2003, pp.3-26.
- 山田晴通「ポピュラー音楽としての「フォーク」概念の複雑性を教える—「音楽史 A」における授業構成—」, 『青山スタンダード論集』(青山学院大学青山スタンダード教育機構), 11, 2016, pp.127-140.